

湘南 国木田独歩記(三)

神野 幸人

(会員 鎌倉市台)

(1) 塾 居

逗子を出で離婚に悩み、欺からず記の筆を擱いて新生活の独歩は、翌三十年佐伯時代の教え子、富永徳磨の妹とみへ求婚、断られた後、三十一年榎本治子と結婚した。

職も報知新聞社、民声新報社と変えては退めて、三十四年十一月、生活困窮のため、妻子を妻の実家に託し、単身神田駿河台の西園寺侯に寄寓していたが、何等かの理由で突然出邸して鎌倉に来たのは明治三十五年二月八日のことで、逗子を出でて六年目である。

「愈々決裂、皆持つて来た。といったところがお荷物

これ丈だ。

(欺かざる記) : 幾らか残っているのは公爵家の或る女性への未練ぞ。それよりも気の毒なのは濡衣……と言った記のものだ。

まあ可いさ。どうでもなれだ。それよりも落行く身の宿をどうする」と、他人事のように云つて、同情した私と二人飄然当てもなく新橋駅に駆けつけ汽車に乗つて鎌倉へ落ちた……と、当時の様子を斎藤甲花は記している。

二月八日(土曜日)

東京を出で午後三時過鎌倉に着す。紳士淑女の群、車を飛ばして其向ふ処に去る。我斎藤甲花と共に茫然として茶屋の店頭に停る。

サテ我等に行くべきは何処ぞと問へども答ふるものなし。兎も角長谷の方にゆかば又た帰るべき家もあらんと。行李を茶屋に托して兩人呑気なる顔をしながら歩む。朝曇り汽車の中より晴れそめて、此時夕日静かに古都の松原に落つと云ふよりも彼方此方の別荘の白き屋根を照らす。

麦畑の肥料悪臭を放つて成程鎌倉は異なりとの感を取り

さしむ。突当たれば長谷寺、右へ折れば大仏、四辻を左へ曲りて数十歩の処に古るぼけた小さな御堂あり。筆つきも古風に貸座しきありとの貼札黒板壁に斜めなり。試に入つて検分するに頗る感心せず。大に吠えられぬだけを幸としてスゴスゴと門を出てサテ如何なるか。

もう少し行つて見やうと当のない相談をして更に踏出す五六歩。思ひきや直ぐ其処に巡查派出所あり。これ幸と案内して内に入れば鬚だらけの査公一室より

現はれ、不審さうに吾等を見廻はす。此辺に借家はありますまいかと横着なる質問を試む。

親切なる当世矢張警官ばかりなり。丁寧に一軒の家を紹介す。



独歩等が借りた家跡

則ち、教へられるままに途を選び漸くのこと権五郎神社に到り。神主と交渉して其持家なる小綺麗な一軒家にありつく事を得たり。

此處に於てか意氣頓に揚り、直に停車場前の茶屋に引返して荷物を取寄せるやら、夜具の世話を依頼するやら、夜の七時頃遂に三杯の酒万丈の気焰となり、饒舌り倦れて寝に就きしは十時頃なり。枕頭遥に波の音かよふ。夢はたのしかりき。

(二月九日 独歩記)

(附記)

鎌倉は此四、五年間に著しく変化せり、別荘の数、加倍しつつあり。従つて商家の多くは飲食物を、あきなふべく之れ亦その数加倍しつつあり。

停車場より長谷寺に到る一條の里路も今は殆ど家並をなして蕎麦屋もあり、西洋料理などいふものもあり。うかれ女の軒堤灯さへ鎌倉山の、星月夜をにぎやはす。

肥料の悪臭の遂に鼻を打つべく、止みて佳希の美香の行人を掠むるも速きにあらざらん。さて然る後、鎌倉も亦遂に俗境たるべき也。

三畳・四畳半・八畳・家賃八圓、その界限は空地であつた。国木田独歩の文名を知る人はなかつたが、東京の西園寺公爵邸にいたことと、逗子の徳富先生知人とて後光がさしたのでらう。家主は大きな机を貸してくれるし日歩の銭がかかつたとは云へ、蒲団は借りるし、台所道具万端は荒物屋のおかみさんが来て調べてくれ、米・酒・肉の通(かよい)まで台所に下げていったとあれば、全てこれ借金である。後に原田東風と三人で収入の成算ない、窮乏な生活で、随分不規則な梁山泊的生活をしたが、独歩にとっては快適な生活であつたのだらう。「鎌倉夫人」「運命論者」その他の名作が短日月の間に続々と書かれている。

三人自炊のわがまま生活も永く続かず八月に押川春浪の家の後の池の別荘を借りて、東京より妻子を呼び寄せた。その年一月に長男虎雄が生まれたので、独歩は二子の父になつていた。

鎌倉生活は作品にめぐまれたが、生活は苦しかった。折から矢野竜溪が日本には画報がないからその刊行を企画して、独歩にその編集を依頼して来たので、独歩はそ

れを承諾して十二月鎌倉を引き上げて芝桜田本郷町に住んだ。

矢野竜溪は大分県佐伯町出身者で、独歩を佐伯鶴谷学館に招いた人である。独歩が佐伯を離れて幾変遷、鎌倉の窮乏生活を自ら称して塾居時代として、全く総ての人々と文通を辞していたが、ここに又上京活躍の時がくる。それも佐伯の人の口説きとは、縁は異なるものである。鎌倉生活十ヶ月、佐伯を出でて八年数ヶ月が経つてゐる。

## (2) 散歩道

(その一 駅より権五郎神社まで)

長谷とは盛久頸座から西のことで、東は大町原又は単に原と云われた所で、田と畑ばかりで道だけが少し高くなつていたので、八幡様の参道が見えていた。駅までの中途には「飢渴島(けちばたけ)」という刑場跡があり荒地になつていた。現在六地藏が祀られて、由比ヶ浜商店街の中心地である。

鎌倉駅の駅舎はもとの貨物駅のあつたところで、いまの三菱銀行のあたりには茶店があり、縁台に赤毛布を敷

いてお客はそこに休んで汽車の来るのを待ち、駅で切符売りはじめの鈴を鳴らすと客は腰を上げたという。

駅より長谷寺までは約一軒、現在は商家を並べ、アルファルト道に松林なく、麦畑に肥料の悪臭の様は夢想だに出来ない。

突当たれば長谷寺、右へ折れば大仏の四辻を左に曲りて数十歩の処に古ぼけた小さな御堂あり……。

夏に踏み出す

五六歩、思ひ

きや直ぐ其処

に巡査派出所

あり……。

小さな御堂と

は、収支寺(庵)の

ことで、建物は大

正十二年二月に再

建され、その折、

東郷平八郎記の



鎌倉駅 (昭和53年)

「四條金吾邸跡」の大きな石碑を建立されたところから、当時は庵であつたらう。

又、五六歩の処

に巡査派出所とは、今の長谷の交

番である。この交

番は明治二十年

頃、伊藤博文が三

橋旅館に泊まつて

いたので、その警護のためにつくられたものである。

権五郎神社とは俗称で御霊神社と呼び、祭神は弱冠十六才で源義家について後三年の役に従軍して豪勇の将として誇の高い、鎌倉権五郎景政である。

例祭には鎌倉神楽を行い、神輿渡り、そして有名な面掛け十人行列があり、俗に非人行列という。その面を収う蔵のあつた処に、独歩が借りた貸家があつた。

そばには、八百五十年のたぶの大樹が杜をなしてい



長谷派出所

る。

現在はすぐそばを江の電が走っている(明治四十年に極楽寺へ大町開通)。当時は車音もない静かな松林であつた。

又、八月に引越した池の別荘とは、権五郎神社より東へ百五十米程の処で、現在は栄(サカエ)写真館がある一角である。

ただ、大正十二年九月の関東大震災で明治の建物は悉く倒れ、又は津波に流されて、現在あるものは全て再建されたものである。

### 散歩道

(その一 長谷附近へ稲村ガ崎)

二月九日(日曜日) 斎藤弔花 記

晏起癖を成して、久しく曙光を見ず……。

……中 略……

われ等が小庵は町の後方の小高き丘にあり、左方には

鎌倉山の一丘一阜起伏して岬をなし、湾をなし、逗子・

葉山の麓につつま手近の松原は海浜院の白亜を彩りて、

薄霞に浮かぶ如し。

久しく都の塵に染まりし眼には、また珍しく見ゆ。今日は空よく晴れたれば、雲の色碧くして、旭を寄せる一角猩紅をなせる。頗る美観なりき。

朝餉を了りて、逍遙の道を家の後面に取り、まづ長谷観音に詣で、けはしき石段を拾ふやうにして登りつめ、観音堂の前に立ちてはるかに海を見下ろし思はず好景と絶叫したり。

独歩子は前年家を構へ、このあたりも度々鑑賞せしところなれば、餘り珍しき様子なれど、我は強めて子を見晴よきところに引張りゆきて、彼の岬は何地ぞ。と根はり葉ほりして、やうやく一望の景皆わが名を聞きて未だ美能ざりしところのものなるを知りぬ。実に恥しながら我は此地を初めて踏める田舎者なり。

南門より入りたれば今度は道を転じて、東門より出づ。街つづきにて忙しき往来ながら、何処となく東京より長閑なる所あり。車馬のゆきまの少なき故なるべし。

……中 略……

午後稲村ガ崎に攀づ。朝の散歩に望み見て、かの絶頂より海を見下さばいかに痛快なるべきなど語りしが事実となるなり。

普明山と石標したる古びたる山門を潜りて、古刹の傍より無我無宙に駆けより、絶頂の突鼻より鎌倉を瞰下し、海を瞰下し、蟻の如く、蠢きたる浜の遊び人を見下し、胸を披いて蒼漠万里の風を抱き、真のお山の大将となりたる心地せる楽しさ……。

……中 略……

山中に珍しき西洋種の草花の苗床あり。はて、と二人顔を見合はして、旅人深山に路迷ひし時はかくやと思はる。当惑の体、ダ

ラダラ坂を下れば  
白き鶏けたたまし  
く羽ばたきして姿  
を隠せしと思ふと  
き狺々の犬の吠ゆ  
る警近づく。

洋客の別荘なり  
と心づきたれば、  
引返しもせず、ヌ  
ソと懐手のまま庭  
先へ下り立ちし二



崎ガ村稲

人を番人らしき男  
つくづく見てあり  
しが「何用です  
か」と、慳貧に問  
ひたり……。

細き街道は坦々

として長く、その  
末は山の裾にから  
れたり。江ノ鳥道  
はこれなり。沿道  
の家少く、家ある  
ところ必ず梅あ

り。梅花三分の白、詩中のものなり。浜に出で、稲村ガ  
崎の断崖の下に憩ふ。浪静かなり。

西に江ノ島は近く呼べばこたへんとす。独歩子は指点  
して腰越を語り、小田原を語る。雲は富士の峰にあつま  
りて、重りて層をなし仙姿わずかに右辺の一脚を箱根山  
の彼方に落すのみ。日は低く、伊豆の山は煙より淡し。  
……中 略……

夜、われは対酌して大に酔ひ、坐に堪へられずして、



富士の夜明けから崎ガ村稲

衾中にもぐり込む。風荒れて、庭前の大樹枝枝相軋る音

凄く夢度々破らる。独歩子未だ衣を解かず端然として灯

下に書を読む……。

……後略……

二月十六日(日曜日)

好晴美和の日、午前われ独歩案内顔して弔花・東風二氏を伴ひ鶴ヶ岡八幡宮より、大塔宮・頼朝及広元の古墳等を見物す。大弓店に入り、原田東風大に妙技を奮ふ。

見るが中に射割を割る二枚、弔花又弓を握る。矢は上を這つて落ち、或は幕の中つて飛ぶ。己れ之を見て遂に弓を執らず。

二月二十一日(金曜日)

我連日の業を終へて原稿成り東京に送る。少しく安心して弔(弔花)、東(東風)の二子を誘ひ極楽寺村の背面なる山に登る。二等三角点の立つ絶頂より大洋と太平野とを大観す。

日暖かに風清く、富士は靄につつまれて其真向なる上部を現はす。浮かべるが如し。靄は薄紫なり。梅花白く

溪間に咲く。

長谷寺は十米に近い日本有数の木造の十二面観音像を本尊とし鎌倉八幡宮・大仏と鎌倉三大観光の一つで、西に緑したる山を背負ひ、東は直線の参道が大町原まで延びて商店軒を並べ、北に大仏、東北に源氏山の美しき森、その裾より家並みをなでるように海辺由比ヶ浜を抱き、更に三浦の岬や湾を展望して南に相模湾を見下ろす小高い山にある。

元来、神社・仏閣は東西南北に門があつて自由に通り抜けられるものと教わつたことがある。独歩の時代はそれを証すが如く、南門より登り東門に下りているが、今は東門一つなり。しかも、入場券を自動販売機で売り、無計画な展望台を作つたが使用に堪えず風雪にその爛体をさらしている。

その為、海への展望は一味ないものとなっている。御本尊の本意に反した恥ずかしい寺の姿勢である(現在は改造して立派な展望台となっている)。

普明山とは極楽寺坂の中腹にある、真言宗普明山法立寺成就院のことである。独歩等は山門を潜つて絶頂に達

したとあるが、今はお寺で行き止まりである。関東大震災で裏山(霊仏山)が大きく崩れたので当時と、大分山様が変わったのだろう。

又、成就院の下の墓地より裏山への古い道があつたと老人の話をきい

て確かめたが、墓地の大きな芭蕉・椿の木の下は絶壁になつていて今は通行不可能である。

独歩等は頂上より右へ左へ小松原を辿つて約二町も行って外人の別荘の裏山に出た。とあるので迂回してその場所らしきに向う。そこは、山頂より袈裟懸に切り削られて山様一変分譲地になつていた。

江戸時代中期の大地震、そして関東大震災で崩れた山を更に人は毀わしてゆく。山が泣いているの感である。



成就院

その数米垂直に切り取られた、白膚の崖の下に城壁の如く石垣した、コンクリートの大きな家がある。

その門柱たるや、二米以上の御影石で豪を誇つていた。(加藤)と表札あり。この山をけづつて分譲地にした役所も業者も憎ければ、物のたとへの通り、この豪邸も憎いものに見えてきた。先日の早朝この向いの山に登つたとき、草取る老夫人にこの分譲地のことを聞いたが、わずか十数年前の乱開発である。

独歩等はこの分譲地のもう一つ北の谷に下りたのだろう。その道は今も行き止まりになつてゐる。外人の別荘の裏山に出て極楽寺の方へ行かんとてくの字形の石段を下る。とあるのはこの道であろう。

細き街道は坦々として長くその末は山の裾にかられたり、江の島道なりとあり、今の針磨橋附近より稲村ガ崎の浜に出て断崖の下に休む、とその頃の七里が浜は今のような防波堤や、湘南遊歩道もなく、漁師の道具小屋がわずかにあり、藻焼く煙がのどかなことであつたらう。

今は昭和十三年に開通した稲村ガ崎の切通しを瞬時に通るので、剣投ぜし名将の古事を偲ぶべきもないが、公園化された休憩所の柵を越えて急段を下がると崖下に出



る。七百年前と同じ岩礁に腰を下ろして

西の方

冬の朝 ここから朝焼ける富士

江の島の弁天橋を黒い帯にし

青い海を袴にして見事である。

冬の夕 ここからの黒富士

寝釈迦山・伊豆の空を真赤に染めて沈む夕日

これ又見事である。

東の方

夏の朝 朝靄の中

光明寺の大伽藍・和賀江の島を染めて昇る真

紅の日輪荘厳である。

夏の夕 海霧の中、

蝶の如く遊走するヨットの群、帰帆の釣舟

これ又一幅の画なり。

(つづく)

杉ヶ越

南海部郡宇目町大字木浦内と宮崎県西臼杵郡日之影町とを結ぶ山越えの道。祖母傾そぼかたむら 国定公園のうち。標高九四〇トク。傾山かたむらと新百姓山の鞍部を越える道で、一般地方道南田原日之影線が通る。

杉ヶ越の頂上直下にトンネルが掘られている。トンネルの横から頂上まで、歩いてほんの二、三分である。峠の名の由来である巨杉も姿を消し、三抱えを越すほどの大きなのだが、いまは切り株を残すだけである。ここに「杉岡大明神」の小さな社がある。この社があるため、別名を大明神越ともいう。

峠の歴史は古いが、これも祖母・傾山群の尾平越や九折越と同じように、鉾山とともに発展した峠である。すなわち、宇目町の木浦鉾山と宮崎県日之影町の見立鉾山をつなぐ道である。

見立鉾山の産物は、いまでは日之影川、五ヶ瀬川に沿う道を下って延岡方面に出されているが、かつてはこの峠を越して大分県側に運び出されていたものである。逆に大分側からは米麦など農産物や海産物、それに鉾山機械などが送り込まれていた。

このため、鉾山全盛時代には馬車が通れるほど峠路は整備されていたが、見立と延岡が結びつくとともにさびれてしまった。それが、昭和五十一年十月二十六日の杉ヶ越トンネルの開通によって復活した。〔角川日本地名大辞典〕・『大分合同新聞』(昭和五十三年五月十七日版)